氏　　名　深沢眞二（ふかさわしんじ）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　論文博第 496 号
学位授与の日付　平成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目　風雅と笑い――芭蕉叢考

論文調査委員　（主査）教授 大谷雅夫　教授 木田章義　教授 森眞理子

論文内容の要旨

芭蕉は俳諧史における最高峰であるが，近代俳句の重んじる「客観写生」の発想に引かれての，芭蕉の発句も写生的態度によって作られたと見る立場からの解釈がいまだに根強い。また，芭蕉の連句に関しては，芭蕉が晩年に尊重した「匂付け」の手法を，それ以前の作品にもあてはめての読解がなされがちである。

本論文は，江戸前期という時代における，芭蕉をとりまく言語・文芸的な環境を再検討して，芭蕉の俳諧作品に新たな視野を開く意図を以て書いた。芭蕉は，現在一般に理解されているよりももっと文学的伝統（風雅）に立脚しており，もっと豊かな俳諧性（笑い）を作品にこめていたということが，本論文の主張の中心である。取り上げる作品の種類によって，大きく全体を「発句篇」と「連句篇」の二つの篇に分けている。

まず「発句篇」は，最初の章「謎といふ句」（4～24頁）で，「なぞ」としての発句の視点が芭蕉とその周辺の作者の作品に対して有効であることを論じた。其角の，

　饅頭で人を尋ねよ山ざくら

という句に関わっての『去来抄』の「謎といふ句」という表現が，相手に「なぞ」を投げかけて理詰めに解き明かしてみせる江戸蕉門の洒落風の一体を指すものである事を示し，「なぞ」と俳諧の歴史的なつながりを確認しつつ，芭蕉の発句にも「なぞ」として解釈すべき句が少なくないことを主張した。その上で，一例として，

　ほとゝぎす正月は梅の花咲り

を，梅の花と卯の花の「白い」という共通点を利用した「なぞ」の句であると解釈している。

以下，「発句篇」の，続く五つの章は，「なぞ」という視点からの芭蕉発句の具体的な検討という意味合いを持つ。また，ここでは，連歌の語彙や発想を芭蕉発句のうちに確認することで，新たな読みの可能性を探ることも併せて試みた。

「蛙はなぜ飛び込んだか―「古池」句の成立と解釈」（25～53頁）では，

　古池や蛙飛こむ水のをと

に新たな解釈を提示した。後に支考が言い出した「蕉風開眼の句」という評価にとらわれず，また，芭蕉自身の解釈も時期や場合によって変化したという前提に立っての考察である。まず，この句の初案「山吹や蛙飛込む水の音」が従来の定説よりも一年早い貞享二年の成立であり，『袋草紙』の能因と帯刀節信の話題に基く滑稽な「なぞ」の句と解すべきことを述べた。そして「古池や」への変更は，其角の「芦の若葉にかゝる蜘の巣」という脇句の影響のもとに，〈数奇ノ者〉たる芭蕉の自己戯画を目指したためだった，と考察した。しかしそののち，伊賀の土芳らに語る段階では「蛙が，啓蟄の訪れの喜びを身体で表現した」といった解釈を芭蕉自身が持っていたと推測される，ということを述べた。

「芭蕉発句叢考」の章（54～127頁）は，①から⑰までの，比較的短い芭蕉発句解釈をまとめたものである。対象とした芭蕉の発句と，解釈の要点のみ列挙する。

①　春たちてまだ九日の野山かな

正月九日の句会の挨拶句であり，春本番の華やかさのまだ乏しい野山に，正月らしいかしこまった気分のなごりを感じとっ

た句。

② 誰やらが形に似たり今朝の春

立春歎老歌の系譜を引く句で，芭蕉は新春にまた一つ歳を取って（この句の詠まれた年には四十四歳），「我ながら誰やらに似てきたぞ」と自問している。おそらくは「父」を答えとする，「なぞ」の発句である。

③ 春立や新年ふるき米五升

近世初期に有名だった狂歌咄，定家と暁月の，米の無心をめぐる逸話（『古今夷曲集』など）を踏まえた句。

④ 雪間より薄紫の芽独活哉

『和漢朗詠集』の「紫塵嫩蕨人拳手」によっている。紫色なので蕨かと思ったら芽独活だったよ，と，はしりの独活でもてなされてユーモラスに答えた挨拶句。

⑤ 水とりや氷の僧の沓の音

従来，宗教的象徴性を持つとして評価されてきた句だが，それ以前に言葉の遊びという点から読まれなければならない。連歌で一般的な「水鳥・氷・沓」という連想語の文脈と，奈良二月堂の「お水取り」の「僧の沓の音」という文脈とを，無理に一句に押しこめた談林風の技法の句である。

⑥ しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

「柴の戸の庵で，茶を粉に挽く」と「柴の戸の庵に，冬の嵐が木の葉を掻くかのように吹き寄せてくれる」の二つの文脈を押しこめた句。宗因の「葉茶壺やありともしらで行嵐」を侘数奇に置き換えている作で，そのことからしても，⑤と同様談林風の作と言える。

⑦ うらやましうき世の北の山桜

加賀金沢の句空に贈った句で，『竹林抄』に見られる専順の連歌付合「見るに心のうつろひやせん／尋ねばやうき世の外の山桜」を元にしている。西行ファンの句空に対して，西行ゆかりの吉野を「うき世の南」とすれば，句空の住む金沢卯辰山は「うき世の北」だ，と挨拶している。

⑧ 作りなす庭をいさむるしぐれかな

『拾遺和歌集』の「たらちねのをやのいさめしうたゝねは物おもふ時のわざにぞ有ける」により「親のいさめしうたゝね」という定型句があり，連歌ではそれを，人の目を覚まさせる物音と結び付けて詠むことが多い。時雨はそのような物音の一つで，芭蕉はそうした発想から「作りなす庭」を時雨が「いさむる」と趣向している。

⑨ 山賤のおとがい閉るむぐらかな

「山賤」と「むぐら」は「荒れたる垣ほ」を想起させる縁語で，芭蕉は自らを「山賤」になぞらえ，謙遜ぎみに「私は荒れた住まいにあって，なかなか句を詠むこともままなりません」と述べたのである。

⑩ 香にゝほへうにほる岡の梅のはな

『古今和歌集』の貫之歌から「香にゝほへ：：梅のはな」の枠を借り，「ふるさと」を伊賀の産品「泥炭」によってほのめかした句。

⑪ 梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

「梅・若菜・まり」は『源氏物語』による連想語。七草の日に東海道を江戸へ向けて旅立つ大津の乙州に，道中の宿の一つ「鞠子」では「とろゝ汁」が名物だよ，と，口調よくはなむけを贈った句。

⑫ やまざとはまんざい遅し梅花

「梅暦」の発想により，伊賀の山里では正月も遅くなってから廻ってくる万歳よりも，梅の花のほうが春を告げる物としてよっぽど当てになる，と言った句。正月七日過ぎてから故郷に帰って句会に出た時の，遅参を詫びた挨拶でもある。

⑬ 命二つの中に生たる桜哉

史実の西行ではなく，『西行物語』の「佐夜の中山」の前後の説話によって，長年会うことのできなかった友人との再会の感動を表現した句。

⑭ ふるすたゞあはれなるべき隣かな

深川で隣に住んでいた僧・宗波の旅立ちにあたっての送別句で，西行の歌と『古文真宝前集』所収の韓退之「寄盧仝」によ

って，宗波が「ふるす」を芭蕉に預け，隣の芭蕉庵はまことに心細く「あわれなことになりそうだ」と述べている。

⑮　此山のかなしさ告よ野老堀

『西行物語』に基き，伊勢の菩提山から東国へ旅立った際の西行やこの地の人々の悲しさを語ってくれ，と言っている。野老には，『拾遺和歌集』に見られる賀朝法師とトコロ掘りの女の問答歌への意識がある。

⑯　京にても京なつかしやほとゝぎす

ホトトギスは旅をする鳥として，京にあっても旅の心を失わない芭蕉自身を喩えている。一見矛盾したことを言って「なぞ」を解かせる句で，その答えは芭蕉の〈旅への執心〉にある。

⑰　ほとゝぎす啼や五尺の菖草

『古今和歌集』の「ほとゝぎすなくやさ月のあやめ草」云々の歌の文句取りで，連歌論に言われる連歌の詠みよう「五尺の菖蒲に水をかくるが如く」を取込んだ句。ホトトギスの爽やかな啼きぶりを賞賛している。

続く「大津にいづる道やまぢを越て」（128～147頁）は，

やまぢきて何やらゆかしすみれ草

について，山路・ゆかし・すみれといった言葉が古典文学の中で持っていたニュアンスを考察し，尾形仂氏が唱えたような「尾張熱田の白鳥山で日本武尊への崇敬の念をこめて詠まれた発句」ではなく，貞享二年春に京から大津へ「志賀の山越え」と呼ばれる古道を通った際の句であることを考証した。また，「何やらゆかし」は「なぞ」の句としての表現であり，その答えは往古に貫之や能因が志賀の山越えを舞台に詠んだ志賀寺詣での女人たちであることを述べた。

「月見三句考—元禄三年の芭蕉」（148～163頁）では，近江膳所の義仲寺で月見の句会が催された時，芭蕉が，

名月や児たち並ぶ堂の椽

名月や海にむかへば七小町

明月や座にうつくしき兒もなし

の三句をこの順に示し，最初の句は「意にみたず」，次の句も「尚あらためん」として，最後の句でやっと定まったことについて考察を加えた。最初の句は謡曲『三井寺』から着想して当夜の連衆を稚児たちになぞらえ，「山寺の児の願ひに，月夜に米の飯」という俗言を踏まえて軽い笑いを誘ったもの。次の句も謡曲から着想した句で，小町を悟道の老女ととらえ，湖水を照らす月を真如の月としてとりあわせたもの。最後の句は，『伊勢物語』八十八段の歌「おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となる物」およびその典拠として幽斎注が指摘する白楽天の「送内」詩により，「皆繰り返し明月をめでてきたものだから，若々しく美しい顔は誰もいなくなったのだね」ということを言ったもの。人間の加齢と月の関わりを描こうとして，芭蕉は，既存の連想語の体系に頼らず，表現方法としての「かるみ」の方向を目指した句作を重ねている，と論じた。

「蓑虫と蟬」（164～179頁）では，「聴閑」という前書を持つ，

簑虫の音を聞に来よ艸の庵

について「人間にあらざる別天地にあそぶ」禅的な境地の表現だということ，そして，

閑さや岩にしみ入蟬の声

については，同様の「閑」の境地を答えとした，一見矛盾する内容の「なぞ」の句であることを考察した。

後半の「連句篇」は五つの章から成る。

「連句の文体と表現」（183～186頁）では，この連句の文体論に関する研究史を要約した上で，連歌の付句文体の研究の成果を，蕉風以降の俳諧の連句の文体に関する研究にも及ぼす必要性を説いた。

「新古ふた道—元禄二年連句の旅」（187～208頁）は，乾裕幸氏と白石悌三氏の先行研究に従って「親句・疎句」論を中心に据えた連句史を概観し，元禄二年に芭蕉が出羽国尾花沢・大石田・新庄を訪れて巻いた俳諧歌仙四巻について，連句史の変遷の上からどのように位置づけられるかを分析した論考である。その分析には，連歌と俳諧の連想語辞書を用いて，親句（連想語による付合）の程度を判断する尺度とした。その結果，尾花沢の清風だけは非常に疎句に傾斜した作者であり，その他の出羽俳壇の人々は親句中心の作風からまだ脱しきっていない作者たちであったと結論付け，芭蕉は，相手によって親・疎の程度を変えながら，総体的には疎句へ導く方向で連句を捌いていたことを述べた。『おくのほそ道』に当地の俳風を

「新古ふた道にふみまよふ」と言っているのは，彼ら出羽の連衆が親句から疎句へ移行しきれないでいた状況を背景とする言葉だったと考察した。

残る三つの章「「めづらしや」歌仙注釈」（209～262頁），「「温海山や」歌仙注釈」（263～309頁），「山中三両吟について」（310～387頁）は，芭蕉がいわゆる『おくのほそ道』の旅の途中，出羽鶴岡・酒田，加賀山中温泉に残した俳諧歌仙三巻に詳細な注釈を試みたものである。これらの注釈をなすに当たっての基本的な姿勢は，各句の式目上の資格を点検して連句の表現におけるルールの規制力を確認したこと，句意と付合とを分け，句意については一句の自立性を重んじた解釈を施し，付合については打越しからの転じに気を配りながら固定的な連想の介在を見落とすことがないように（つまり，いたずらに「匂付け」と判定して済ますことをしないように）心掛けたことである。

「「めづらしや」歌仙注釈」には「余論・なすびの食べ方」を付して，この歌仙の発句「めづらしや山をいで羽の初茄子」の「茄子」は冷して生で食されたということを考察し，新出中尾本『おくのほそ道』金沢の条に「瓜天茄」という表記があって自筆本の真贋の論争を呼んでいる件にも言及した。

「「温海山や」歌仙注釈」では末尾に，この歌仙における能因と西行（ともに陸奥行脚の先人）の影響の強さを指摘した。また，芭蕉の意図に沿った付合を生み出すための協力者としての曽良の役割を指摘した。

「山中三両吟について」では，冒頭に当該の歌仙の成立過程を論じた。すなわち，北枝の手控えである『やまなかしう』の記事に基いて，連句の進行中にその場で修正が加えられた場合と連句が先まで進んだ後から推敲が加えられた場合とがあることを分析し，芭蕉の推敲は表現の良し悪しの判断によるばかりでなく，式目上の差し合いをただすという面からも理解すべきであることを述べた。また，表現上の理由から推敲を加えたと判断されるケースでは，付合の「重さ」を排除する方向，つまり固定的な連想語を避けて疎句化を図るという方向での手が加えられていたということを述べた。それは，先の二つの歌仙注釈からも見て取れる傾向であり，以て，元禄二年当時の「かるみ」とは，付合の親疎をめぐる具体的な方法論だったのではないか，と考察した。

論文審査の結果の要旨

近世俳諧文学の研究には，同じ時代の浮世草子や読本などの研究にはない，一種独特の困難が存すると思われる。俳諧は，明治以降は俳句に形を変え，今日にいたるまでその実作が盛んに続けられ，そして，近現代の俳句の実作者は，近現代の表現意識によって近世俳諧の表現をさかのぼって解釈し，評価し，それが古典俳諧研究の基調となることがあるからである。中でも，その影響力の最も大きかった実作者のひとり正岡子規の高唱した「写生」論，そして連句否定論は，近世文学としての俳諧の研究を拘束することともなったであろう。芭蕉の発句が写生の極致としてほとんど崇拝されるにいたる一方で，その連句にはその文学的達成にふさわしい十分な関心が向けられなかったのである。もちろん，近年は俳諧を「座」における，「挨拶」の文学として捉え直そうという努力などもなされて来てはいるが，「孤高の俳聖・芭蕉」の「わび・さび」の文学という俳諧観が，いまなお現代の読者，研究者の見方を偏向させていることがないとは言えない。

本論文は，前半が芭蕉の発句，後半が芭蕉の連句を，そのような近代的文学観の干渉なしに，それぞれ当時の俳諧の詠み方，味わい方に即して注釈的に読み解こうとする試みである。まず前半の発句論は，新鮮な着眼と徹底的な調査にぬきんでた力のある考証であり，芭蕉の発句には，何よりも俳諧としての「笑い」があること，そして特に晩年には「謎の句」があることを論じるものである。その博引旁証，論証の緻密はもとよりのこと，何よりも，その発句にいかなる笑いがあるか，どこに謎があるかを見究めようとする明確な意志が，それらの論文の力強さを生んでいる。たとえば有名な「古池や蛙飛こむ水のをと」の句について「蛙はなぜ飛び込んだか」を問い，そこには俳諧的な笑いが是非あるべきだという考え方から，それが『袋草子』の一つの説話を典拠とする発想だという斬新そのものの読みを提示した。また「やまぢきて何やらゆかしすみれ草」については，志賀越えの道をゆく女人の面影をそこに読み取る，これもまったくの新説を示した。その他，芭蕉発句について次々に示された新しい読みは，時に審査委員の間で賛否の両論が闘わされたように，そのすべてが，ただちに定論となるものとは必ずしも言えないであろうが，しかし，その諸論を通じて，芭蕉の発句は近代的な写生句では決してあり得ず，近世の俳諧としてどこかに笑いの要素をもつものであり，時には謎をひそめたものだという論者の主張は鮮明に貫かれている。停滞気味の芭蕉発句の研究に，強烈な刺激を与える画期的な論考として，高く評価できるものである。

また，後半の連句の評釈は，もともと和漢聯句，連歌寄合書の研究から俳諧研究に進んできた論者の強みが十分に発揮された練達の業である。論者は，連句作法書や連歌辞書，連歌寄合書や俳諧付合書を自在に使いこなし，「どこがどのように面白いのか」を徹底的に明らかにし，あるいは，芭蕉が実力に差のある連衆たちを各々どのように指導して，連句の変化にとんだ進行をはかったかを考証した。連句を読む楽しみを十分に堪能でき，しかもきわめて高い学的価値をもつ評釈となっている。

そのように，本論文は発句篇，連句篇ともに研究としての高い達成を示しているが，あえて，その前後半を比較してみると，句の連ね方に色々な制約のある連句篇においてその注釈は安定していると見えるのに対して，そのような表現の拘束の少ない発句の解釈においては，典拠などの調査が進めば進むほどに句の含意が錯綜して読み取られており，果してそのように複雑な句意が当時の読者にただちに理解できたのだろうかという不安を，時に感じさせることがあった。同時代の読者の立場において，その新解釈はさらに検証される必要があると思われた。

また，連句篇については，とりあげられた三つの歌仙連句が，いずれも元禄二年の作であり，それ以降，特に芭蕉が軽みを提唱した頃の連句において，同様の読み方が果して可能であるのか。論者の芭蕉研究の，今後の課題とされるべきであろう。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十七年九月九日，調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。